身近な感染症を防ぐ

大人の長引くせきは… 百日ぜきかも

子どもにうつさないように、早めに受診を

かつて子どもの感染症として知られ、せきが長引く「百日ぜき」は、今や患者の過半数を大人が占めるようになってきました。その主な原因は、幼少期に接種したワクチンの効果が大人になって薄れることや、周囲に患者がほとんどいない環境で育ったために、軽く感染して免疫を追加する機会も得られなかった大人が増えているため、と考えられています。

子どもが百日ぜきにかかった場合、激しくせき込むことが特徴ですが、大人がかかった場合、「特徴がないのが特徴」といわれるほど、症状だけでは通常のかぜとの見分けが困難です。このため、従来の生活を続け、マスクもせずにせき込んで感染を拡大させてしまうことがあります。ただし、大人の患者さんの中には「夜中のせき込み」を訴える人もいます。

例年、百日ぜきは春から夏にかけて感染者が増え、真夏にピークを迎えます。これからの季節に、せきが1週間以上も続き、特に夜中にせき込むようなことがあれば、周囲の子どもにうつさないように気を配りつつ、(診断が確定できるまでに1週間かかるため)早めに受診してください。

＜神津内科クリニック(東京都)院長・神津 仁(こうづ ひとし)＞